



その10

桓武天皇

—かんむてんのう—

(平成23年8月1日号—第274号)



桓武は天応 [てんのう] 元年(781)に即位すると、翌年には奈良・平城京を去る方針を明らかにし、都を長岡京(現在の向日市・長岡京市など)へうつしました。この遷都の大事業をなし得たことを天神の恩恵によるものとして、都の南に郊祀壇 [こうしだん] と呼ぶ土壇を設け、感謝の祈禱を行いました。延暦6年(787)の冬至には、同地で北極星をまつり、国家の安泰を祈りました。このように郊祀壇を設けて祭祀を行うことは、中国の皇帝が天壇を設けて天神をまつる例にならったもので、日本ではこれが最初です。

郊祀壇の場所は交野柏原との記録があり、杉ヶ本神社(片鉾)周辺、片埜神社(牧野阪)周辺などが推定地となっています。また、交野天神社(楠葉丘)の縁起によると、同社はこの郊祀壇跡に造営したとしています。

また、桓武の母である高野新笠 [たかののにいがさ] が百済武寧王 [ぶねいおう] につながる渡来系氏族の出身であったため、百済義慈王 [ぎじおう] の後裔である百済王 [くだらのこにきし] 氏に対しては身内のような親近感を表しており、「百済王等は朕が外戚なり」と詔 [みことり] を下して同氏らの位階を進め、百済寺に対しても、稲や綿などをたびたび施しています。

桓武は鷹狩りを大変好んでおり、当時、多くの鳥獣が生息する風光明媚な地として知られ、百済王氏の本拠でもあった交野ヶ原でたびたび遊猟しました。この地には、庶民が狩りをすることを禁じた禁野と呼ばれる朝廷の狩場が設けられ、現在でも禁野という地名が残ります。

また、交野行幸 [ぎょうこう] の際には、楠葉にあったとされる右大臣藤原継縄 [ふじわらのつぐただ] の別荘を行宮 [あんぐう] としたとされるほか、禁野あるいは中宮に行宮を造営したと考えられています。



百済王氏の氏寺跡とされる
特別史跡百済寺跡(中宮西之町)